「児童の世紀」を振り返る

――その五――

本田　和子

イデオロギーと「子ども」の遭遇

「立身出世主義」の場合

今世紀に発見された「童心」は、すかさずイデオロギーの標的ともされ、その時々の中心的イデオロギーによって存分に活用されている。しかも、その前向きで健康な特性と、純粋で汚れなき特性の両者ともどもに……。

たとえば、わが国の場合、明治近代は幕藩体制下の身分制度を解体することで、広く大衆のなかに上昇的心性を培養し、「立身出世主義」というイデオロギーを蔓延させた。そして、それが、すかさずターゲットに選び、

すばやく手を結んだ対象が思春期前後の若者たち、すなわち「少年」と呼ばれる人々だったのである。

というのは、「士農工商」という身分制度から解放された庶民の前に、新しい可能性として出現したのが「立身出世」であったし、しかもそれは、学制改革に基づく就学の勧めと結び付いて喧伝された。すなわち、勤勉に刻苦勉励する者の前に立身の道は開けるのだ、と……。したがって、「立身出世主義」は、「子ども」や「若者」と優れてかかわりの深い社会的信念として、養育の行く手に高々と掲げられ、学ぶ者たちによっても、現実的な努力目標として選択されたのである。

近代文学研究家の前田愛は、『学問のすすめ』や『西国立志編』が、爆発的なベストセラーとなったことをこのことの証しと見る。さらに、少年たちの前に新たに創作されて提供される読み物類も、目標を目指して倦まず弛まず学ぶことを奨励し、その努力は必ず報われる筈とばかり、向日的な未来を指し示して見せた。たとえば、小説家国木田独歩は、その著作『非凡なる凡人』において、『西国立志編』に導かれて人生を切り開いて行く没落士族の少年を描き出している。文豪幸田露伴の場合は、『西国立志編』に変えて、二宮尊徳の『報徳記』を選んだ。すなわち、『鉄三鍛』と題された少年向け小説のなかで、『報徳記』によって発奮し、貧困の果ての挫折から立ち直る主人公を造形したのである。『報徳記』とは、言うまでもなく二宮尊徳の伝記、明治の学校教育は、薪を背負って書物を読む二宮尊徳像を象徴に選んで、「学んで知を蓄えること」と「進めて業を成すこと」を少年たちの目標として心に刻印させたのである。

新しい時代が提供した「立身出世主義」は、これも新しい時代が要求している学校教育の普及運動と連動し、結果として、広く少年たちに共有されて彼らの向上意欲を煽った。その結果、上級学校に進学することが社会への登竜門として少年たちの前に立ち塞がり、そこから外れた者たちは、田山花袋の『田舎教師』に象徴されるよ

うに、早々と敗北者としての挫折を味わうこととなった。

上級の学校への進学と立身出世が、必ずしも緊密に連携し合っていて、それ以外の者たちに道が閉ざされていたという訳ではない。しかし、「末は博士か大臣か」という俗言が物語るように、「立身出世主義」というイデオロギーが、人々の目に学歴を肥大化して見せたことは疑うべくもなく、『田舎教師』の主人公はその肥大化した学歴幻想の犠牲者であった。

捕獲される「童心」

――大正自由主義とプロレタリア主義――

一九二〇年代の末に、プロレタリア主義もまた、子どもをターゲットとした闘争を開始する。直前に勃興した大正自由主義のうち、特に芸術的児童文学運動を反面教師として、労働者階層の子どもらのために革命の文学を提供すべく、プロレタリア童話を提唱したのであった。

プロレタリア主義の児童文化運動家は、『赤い鳥』に代表される芸術的児童文学の主張を、「芸術」という隠れみのによって現実を隠蔽するプチブル的イデオロギーと批判し、子どもたちに現実の諸矛盾を認識させ、革命への意志を覚醒させることこそ子どもにかかわる諸運動の使命であるとした。子どもたちを、芸術などという麻薬によって眠らせるのではなく、しっかりと目を見開かせ、弱者が虐げられ貧しい者たちがより以上に搾取されている実情への怒りをかき立てるべきだと言う。

『赤い鳥』運動の指導者たる鈴木三重吉が、童心の躍動する童話・童謡の創作と提供を標榜し、そのために多くの作家たちを動員したことは周知であろう。それに賛同した一人、詩人の北原白秋が、童謡とは「童心童語の歌」であるとしてわらべうたを範としつつ、童謡史に一新紀元を画したこともよく知られている。

それに対して、プロレタリア主義者たちは、「童心」などという抽象的なものを根拠とすることを欺瞞的と非難

し、目の前の生きた子どもたちを対象とすべきだと主張する。「童心」などと自身の観念に過ぎぬものに依拠することを止めて、生身の生活者たる子どもたちに、生身の現実を直視させねばならないとするのである。次に示すのは、この二つの立場から謳われた童謡であるが、いずれも「鳥」をテーマにしながら、両者の違いが如実に現れた作品として興味深い。

赤い鳥　小鳥　なぜなぜ赤い　赤い実を食べた
青い鳥　小鳥　なぜなぜ青い　青い実を食べた
白い鳥　小鳥　なぜなぜ白い　白い実を食べた

—北原白秋『赤い鳥・小鳥』—

ふくろは老いぼれ　いくじなし
お山にかくれて　夜は鳴く
「ぼろ着て奉公」　おらイヤだ
つばめはハイカラ　燕尾服

「土喰て虫喰て　口渋い」
もんどり打っては　空でなく
にわとりゃ朝から　声高く
まっ紅な鶏冠を　ふり立てて
蹴爪とぎとぎ　「米くれろう！」

—槙本楠郎『梟と燕と鶏』—

前者は、「赤い鳥はなぜ赤いか？」という問いに対して、「赤い実を食べたから」とあどけなく納得するであろう子どもの姿に、混じりっけなしの「童心」を見、それを、これまた飾りっけなしのシンプルな言葉で歌って見せる。後者は、そうした混じりっけなしの「童心」などありはしないだけでなく、それらをそのままに歌い上げるところに何の意味も見られないとばかり、むしろメッセージ性を打ち出すことを狙いとする。この例で言えば、動物の動作や泣き声に換喩される役柄に、そのメッセージを託して、子どもらの闘争心を駆立てようと

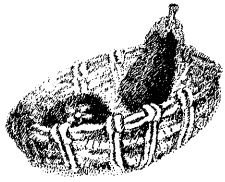
するのである。

ところで、見るからに違いの目立つこの二つは、しかし、次のような意味では共通の徴に彩られているのではないか。なぜなら、両者とも、子どもに託された自身の「子どもイメージ」を対象とし、それと自分たちの信念とを出会わせようとしているのだから。

大正デモクラシーの興隆と、安定期に入った資本主義経済市場は、独特の大正都市文化を展開させた。子どもらを巡って生起した自由教育と芸術運動は、そのエッセンスを蒸溜させた「大正じるしの子ども向け美酒」にも譬えられよう。したがって、そのターゲットとされた「童心」は、美酒に酔うに相応しく、健やかにして繊細、のびやかに解放された人間の理想型であった。

一方、近代化の諸矛盾に胚胎された無産主義は、昭和初期の経済不況によって革命への意志を先鋭化させつつ、労働階層を地盤とした反体制の戦列を固めようとしていた。それに加えて、近づく戦争への足音に危機感は増幅される。子どもらをも巻き込んだ戦線の展開は、当事者の総括によれば、革命闘争と平和運動の合体した姿とされている。労働者階級を子どもレベルまで結束させ、反体制ののろしを上げることで、支配階層の暴走を食い止めることも可能ではないか。と、ばかりに、彼らが選択した「子ども」は、無邪気さに憩うにまして、逞しく合理的、戦いをも辞さぬ団結心に満ちあふれた働く者たちの希望の星であった。

したがって、そのいずれもが、それぞれの望むところをさながらに体現するものとして、子どもの純粋さに絶大の期待を寄せ、自身の抱くイデオロギー的信念の受け皿として、それを活用する。すなわち、それぞれの仕方で子どもの「童心」を捜し出し、そこに次の時代を仮託



して未来の希望を夢みようとしているのだから。両者が共通の徴に彩られて見えるのは、この所以である。

ところでこの両者、果たしてどちらに軍配が上げられるのだろうか。子どもらの「心」なるものを射止めて、彼らを虜にし得たのはどちらの陣営だったのだろう。改めて振り返るとき、私どもは、次のような事実に気付かされざるを得ない。すなわち、勝負はいずれとも言い難く、どうやらイデオロギーの側の一人相撲に終わったのではなかったか、と……。

ファシズムと子どもらの大合唱

ファシズムは、「童心」の活用に巧みである。その健康な野生性の発揚体である側面に働きかけて、彼らを恐れを知らない勇敢な戦士に仕立て上げる。一方、「童心」が憧憬されるべき純粋性として理想化されるとき、それは、掲げられた目標、たとえば祖国のためになどいう、崇高な目標への献身のために動員されることになる。

今世紀、世界各地に発生したファシズムが、子どもたちを「童心」の所有者と措定した上で、その両面を限りなく巧みに活用して見せたのは、このことの端的な証しと言えよう。とりわけ、わが国やヒットラーのドイツなど、全体主義的イデオロギーを国是として掲げた国々では、それらを学校や青少年団という組織体を通過させることで、彼らとの間に比類のない密月を発生させているではないか。

第二次大戦下のドイツにおいて、「ヒットラー・ユーゲント」の名の下に結集した少年少女の群れは、ユダヤ人の摘発や彼らを匿う者たちの密告に関して、大人たちを越えて有能であった。総督賞欲しさに、肉親までも密告した少年の逸話もよく知られている。彼らは、まっさらな心で指導者の言を受け入れ、ためらいもなく繰り返していた。「汚辱にまみれたゲットーの民、ユダヤ人を追放せよ。わが国土から抹殺せよ」と……。そして、誇

らしげに叫ぶのだった、「ハイル・ヒットラー。栄光に満ちたわが祖国よ」と……。

わが国の場合も同様である。堅く巻いた日の丸の鉢巻きで決意のほどを表しつつ、少年少女たちは叫んでいた。「わが日本は神国なり」「鬼畜米英、撃ちてし止まん」と……。彼らのなかには、一九四四（昭和一九）年の満一七歳から兵籍編入を認めるという非常措置に応じて、少年飛行兵を志願し、戦場に命を落とした者さえもいた。彼らは、その幼い体に「祖国防衛」という美しいスローガンを刻印し、戦場に散った父や兄たちの跡を継ぐことを使命と信じて、毛ほどの疑いも抱かなかったのである。

勝ち抜く僕ら　小国民
天皇陛下のおんために　死ねと教えた父母の
赤い心を受け継いで　心に決死の白だすき
かけて勇んで　突撃だ！

――小国民戦時歌謡『勝ち抜く僕ら小国民』より――

大戦末期、「玉砕」という名の全滅のニュースが相次ぎ、戦局は日増しに不利と伝えられた当時も、密かに敗戦を予測する大人たちとは異なり、子どもたちはひたすら「神州（日本のこと）不滅」と信じ、自身の幼い命を捧げることでその予言を全うしようと望んでいた。先の歌を口ずさみ、木刀や竹槍を振り回しつつ、「日本必勝」を祈願していた子どもらの前に「敗北」という言葉は存在していなかったのだ。

中国における文化大革命時の紅衛兵の活躍は、いまだ、私どもの記憶に新しい。少年たちは、あるいは少女たちをも含めて、彼らはためらいもなく信じ、行動していた。「毛沢東主席と党首脳の命令に間違いはない」と……。紅衛兵のためらいもない摘発によって、専門家と

しての生命を断たれた者たちの証言は、当時の彼らの暴虐ぶりを伝えて聞く者を慄然とさせる。さらには、中近東、東欧、アフリカ等の各地に発生する民族紛争の渦中で、少年兵たちの活躍が示すのは、ファシズムと少年少女たちとの見事なまでのマッチングであろう。私どもは、この姿に脅威の念を抱かされると同時に、「無知」と「純粋さ」とが等価に見えることに戦慄を感じざるを得ない。

「洗脳」という用語がある。しかし、ファシズムが標的としたのは、「脳」であるにまして「心」ではなかったろうか。もし、造語を許されるなら「洗心」……。とかく合理性を欠いたファシズム・イデオロギーのターゲットは、ロゴスの府たる「脳」ではなく、パトスの居場所たる「心」、しかも、幼く混じりっけのない子どもたちの心こそが、相応しいと言うべきかも知れない。そして、今世紀後半の世界は、こうした「洗心」機能の対象として、子どもたちこそが最も相応しいと発見し、その発見を濫用したのだった。

イデオロギー・学校・家庭

わが国近代化の歴史を振り返って、その時々に勃興し世を支配したイデオロギーのうち、最も徹底して若年層を虜にしたのが、次の二つであることに気付かされよう。すなわち、明治の「立身出世主義」と、昭和の「皇国主義的ファシズム」がそれである。大正芸術主義が都市中産階級の父母や子どもをターゲットとし、プロレタリア主義の児童文化運動が、労働者階層の子弟を主たる対象としていたのに比して、先の二つは、広く全国の子どもたちの上を覆い、彼らを支配し彼らのなかに浸透していった。

この両者の成功は、言うまでもなく、それらが、学校教育と結託した点に求められる。しかも、わが国の場合、「不学の人の払底」は近代化に不可欠の重点政策の一つとして、国是として推進された。教育の中心が、と

かく国公立に置かれがちだったのもこのことと無縁ではない。したがって、体制の選択したイデオロギーが、国公立の学校教育を支配下におくことには、何ほどの支障もありはしなかったのだ。

立身出世主義は、明治日本がモットーとした教育の振興と連動し、二宮尊徳に象徴されるように寸暇を惜しんで学業に励むことを奨励し、そのことによって栄達の道が開けることを暗示した。したがって、上昇を望む者たちは、学校教育を不可避の通路と考えて身を投じ、一方、学校は、彼らに忠実に努力することを勧めた。結果として、子どもたちは、学校制度という檻のなかにしっかりと囲い込まれ、そのなかで、自らの意志によって栄達のために勤勉に努力する道を選択する。あんなにも短期間に、義務教育の普及・徹底を見たのは、立身出世イデオロギーと学校教育との、こうした緊密な連携プレーの賜物と言うべきであろう。

第二次大戦下の皇国主義イデオロギーの場合も、同様に、学校教育はその徹底に大きな役割を果たしている。国民学校令の制定により、義務教育を支配下においた時の権力は、ためらいもない大胆さで幼い者たちの「洗心」に乗り出した。カリキュラムや教科書の改訂、軍国主義的指導方針の徹底、さらには、雑誌や映画などの娯楽財の統制など、「洗心」のためのプログラムは放課後にまで及ぶ。もちろん、その背後には、文部当局による情報管理網が綿密に張り巡らされていたことは言うまでもない。先に引いた子どもの歌など、その典型例と言い得る。当時は「小国民歌謡」などと銘打たれていたそれらは、煽情的な歌詞と悲壮なメロディによって彼らの心を捕らえた。子どもたちの全身が、頭のてっぺんから爪先まで、「お国のため」一色に

染め付けられたのは当然という他はない。

大正自由教育や芸術教育運動は、一部は学校教育に浸透し相互連携の動きも示したものの、そもそもから国公立学校教育のアンチテーゼとして出発した経緯もあり、その飛翔の天地は、しばしば学校教育の外に求められがちであった。また、プロレタリア主義の教育文化活動は根底から反体制運動に他ならず、学校教育の外に拠点を設けて、独自のプロレタリア少年同盟的なものの組織化を志向している。結果として、この両者とも、広く子ども一般の心を捕まえるに至らず、特定の一部グループのみの信条として、ささやかな影響力しか持ち得なかったし、しかも短期間の消滅を余儀なくされている。わが国の場合、イデオロギーは、学校教育と結託した場合にのみ、広く子どもらと手を結び得るということを証しするかのように……。

さらに、前回にも触れたが、今世紀は、市場原理が「子ども」あるいは「童心」をターゲットとすることで、新しい局面を切り開くことに成功している。市場原理を、仮に「商業主義的イデオロギー」と呼ぶとすれば、それは、先ず教具・教材、教科書や文房具、あるいは学童服・運動靴など、「学校」を通路とすることで新地盤を形成し、その後、児童文学書や玩具・遊具、子ども服や子ども用生活用品と、「家庭」に焦点を合わせることで販路を拡張した。とすれば、イデオロギーと子どもの遭遇は、先ず「学校」に、次いで「家庭」に、媒介されることでのみ可能となる。近代型「子ども」の発見は、「学校」と「家庭」の発見と連動するとされるが、イデオロギーが子どもとの関連で猛威を奮い得たのは、まさしく、この子ども史上に出現した「近代」の所以であった。

（聖学院大学）